

た可能性も考えられよう。

無土器とはいっても、生活に供する何らかの容器は必要だったろう。今後、貯蔵、運搬などの目的で土器の代わりに、葉（クワズイモ、バシヨウ、クバ、ハマユウ等）、貝殻、竹籠、革袋などを使用したことも考慮する必要がある。

八重山の無土器文化の様相は複雑である。八重山の無土器文化の解明には物質文化を扱う考古研究者のみではなく、地質研究者や生態研究者などを含めた広い視野からのアカデミックな研究が必要であると考ええる。

## IV 名蔵貝塚群をめぐる問題点

無土器文化を考える上で貴重な資料である名蔵貝塚群について考察する。

名蔵貝塚群は無土器文化を代表する貝塚である。同遺跡出土のものと類似する遺物を求めて周辺地域に目を転じてみると、台湾の先史文化には同様な遺跡・遺物はないが、フィリピンなどの南方文化（黒潮文化）や中央・東ミクロネシアの先史文化のなかにそれを見ることができると。

名蔵平野の南端では前勢岳の北東から大川堂川が山麓を流れてバギナーの田地を通りクードー浜に注いでいる。この大川堂川の海岸寄りの架橋から道路に沿って北へ向かい、ハイガー（南の川）を通り、於茂登岳を水源として流れる名蔵川（ノーラカラ）の中流にかけて広がる名蔵平野の氾濫原（低湿地帯）のなかにある標高一〜三メートルの低砂台地上に形成されて棒状を呈する貝塚群が名蔵貝塚群である。

低砂台地は大川堂川架橋あたりから、道路に沿って弧状に延々と一千九百メートル以上続いており、自然堆積の海砂利層（白黄色層）、腐植土層（黒褐色層）、包含層（黒色層Ⅱ生活層）などが入り組んで一五カ

所の地点に点在する。

包含層の厚さは薄く、約一〇～三〇センチメートルである。低砂台地は低湿地帯（約九百メートル）を挟んで神田丘陵へと続く。名蔵川中流の約標高一・七メートルに位置する神田丘陵には大田原（神田原）遺跡があり、神田丘陵の下には神田貝塚がある。

一九七八年に神田貝塚の緊急発掘調査が行なわれ、石斧や有孔石器（石錘）などが出土したが、それらは名蔵貝塚群のものと酷似している。神田貝塚は名蔵貝塚群の低砂台地の延長上にあることから同一時代の海退期に形成された貝塚と考える。

名蔵貝塚群については、「新しいと見る」見解と、「古いと見る」見解、また、「無土器時代の初期と見る」見解などがある。以下にそれぞれの見解の論拠をまとめてみた。

### 一 「新しいと見る」見解

① 無土器貝塚ではほとんどの炭素14年代が新しく出ているので比較的新しいと見る。

- ・石垣島の名蔵貝塚群<sup>(2)</sup>……………九四五±七五年BP
- ・石垣島の神田貝塚<sup>(3)</sup>……………九四〇±六五年BP
- ・石垣島のフーネ第二貝塚<sup>(4)</sup>……………九六〇±七五年BP
- ・西表島の船浦貝塚<sup>(5)</sup>……………九四〇±七〇年BP
- ……………(一〇一〇年AD)
- ・西表島の仲間第一貝塚<sup>(6)</sup>……………一二五〇±六五年BP

② 無土器時代の各遺跡からは中国の唐代の銅銭貨「開元通寶」が採集されている。西表島の仲間第一貝塚<sup>(7)</sup>（三枚）や石垣島の西海岸・

崎枝赤崎貝塚群<sup>(8)</sup>（三三枚）、北海岸・吹通川河口貝塚<sup>(9)</sup>（一枚）、東海岸・白保嘉良嶽貝塚群<sup>(10)</sup>（一枚）という状況である。この開元通寶は唐の初め六二一年から唐代を通じて各地で铸造され、後に南唐や清末の太平天国においても同じ銭文をもつ銭が铸行され、広くアジア一帯で使われていた。そのことから無土器文化も新しいという考えである。

③ 名蔵貝塚群からは、広い範囲にかけて薄手土器（器形は今のところ不明、小粒の貝殻を混入）が微量かつ散発的に採集される。また鉄鍋二片、中国製の青磁三片、褐釉陶器四片、玉縁白磁一片、そして類須恵器（徳之島のカムイヤキ系陶器）一片などが発見されており、そのことから一二世紀頃のスク時代の初期に位置づけられ、さらにスク時代に継続する遺跡ではないかという考え方がある。

④ シャコガイ製貝斧は、中世のスク時代（一二世紀頃から一六世紀頃まで）の遺跡からも一点ずつ採集されている。また、マイクロネシアなどの島々でも、近世までカヌーを作るときに貝斧などを使用している。それ故に貝斧文化は新しいという考えである。

### 〔石垣島〕

- ・大浜カンドウ原遺跡……………大城村遺跡<sup>(12)</sup>（中世集落）
- ・宮良アラガー遺跡<sup>(13)</sup>……………陶磁器散布地

## 二 「古くも見る」見解

- ① シャコガイ製貝斧は、八重山の先史時代の赤色土器文化期の遺跡からも発見されており、古く遡ることができる。
- ・石垣島の竿若遺跡<sup>18</sup> 二点出土（赤色土器共伴）
  - ・石垣島の冨崎遺跡 二点出土（赤色土器共伴）
  - ・西表島の仲間第二貝塚 一点出土（赤色土器共伴）
  - ・与那国島のトゥゲル浜遺跡<sup>19</sup>
- ② フィリピンのパラワン島のドゥヨン洞穴<sup>20</sup>から埋葬の遺品として大型の磨製アッズ（手斧）、シャコガイ製アッズ（手斧）と、イモガイ製の装飾品やサルボウの貝殻の穿孔されたものが出土している。それらと全く同種の大型の磨製石斧（アッズ）、シャコガイ
- ③ 自然堆積層（海砂利層）と腐植土層、包含層（生活層）が入り組んで点在するのは突発的な洪水や津波などの影響ではなく、自然で持続的な海進現象の作用によって本来（一次堆積）の堆積層が攪乱されて貝殻の散布状況が不自然となり、その結果点在する地点貝塚のように見えるのだという説がある。後述する海進海退に
- ⑤ 名蔵の低砂地台地は、縄文海進後の海退時期で白保の東海岸の砂丘<sup>17</sup>（埋没腐植土の測定値、一三三〇±八五五年BP資料採集、古川博恭氏・木越邦彦学習院大学教授測定）と同時期に形成されたところの新期砂丘として考えられている。そのことから名蔵の低砂地には、現代海退期（八世紀から一三世紀頃）に無土器文化をもつ人々が定住し貝塚を形成したという考え方である。
- 〔宮古島〕
- ・宮良チビスク遺跡<sup>14</sup>……………チビスク村跡（中世集落）
  - ・宮国元島<sup>15</sup>……………宮国村跡（中近世集落）
  - ・保良元島<sup>16</sup>……………保良村跡（中近世集落）

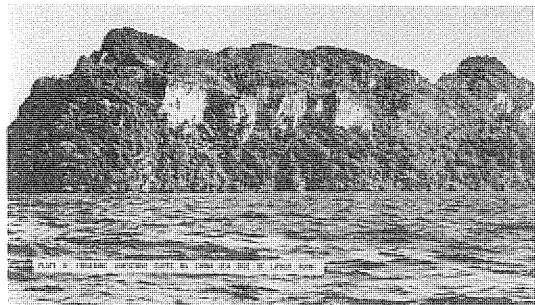


写真1 南中国海に面すブウン岬の石灰岩の崖（フィリピンのパラワン島）

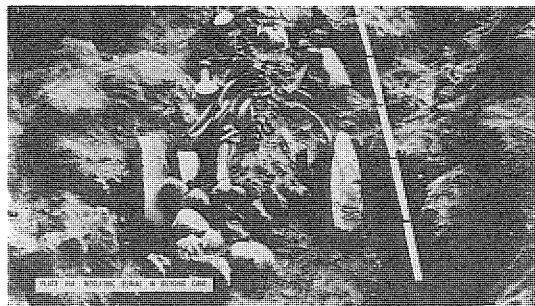


写真2 ドゥヨン洞穴の新石器時代の墓（フィリピンのパラワン島）  
(Fox, R. B. *The Tabon Caves: Archaeological Explorations and Excavations on Palawan Island, Philippines*. Monograph of the National Museum No.1, Manila. 1970.)

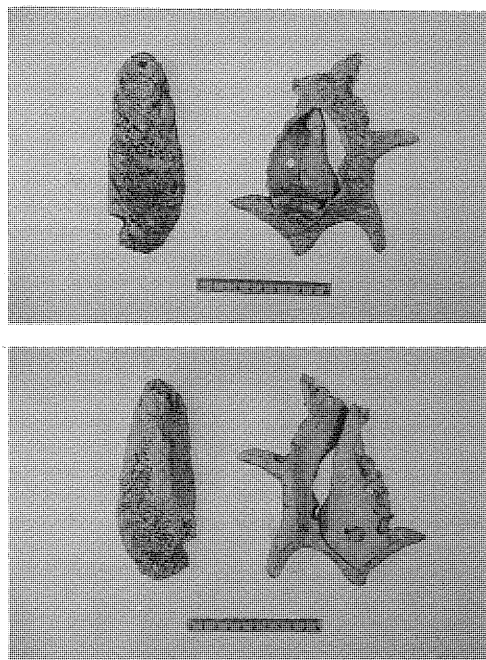


写真3 名蔵貝塚群から採集した貝製品（表・裏）  
シャコガイ製貝斧やスイジガイ製利器にフジツボ  
が付着したものと思われる。

より、名蔵の堆積層は海進によって少なくとも一度は海面下に没した可能性がある。（後述の「第5章八重山の先史遺跡に関するコラム」のなかの「八重山の先史文化を考える一視点」二九六頁を参照）

それを示すように一部のシャコガイ製貝斧にはフジツボが付着したり、フナムシによる虫喰いを受けたりしている。もしこの仮説が正しいならば、貝斧の年代は少なくとも約二千五百年前頃まで遡ることになる。（名蔵貝塚群から採集されるシャコガイ製貝斧やスイジガイ製利器など素材の貝は、ほとんどが死貝で作られていて、なかには化石のようなものがある。また、自然堆積層

④（海砂利層）からスイジガイ製利器が一点採集された。貝殻が広範囲に散布し、包含層が一〇〜三〇センチメートルと薄いのは何か不自然である。）

神田貝塚は現在客土によって新しい土砂で被覆されているが、一九六三年の筆者と國分直一氏との共同試掘調査の結果を國分氏は、「八重山先史系土器とその北上の形跡」<sup>21</sup>のなかで、神田貝塚の地層状況を確かめようとしてボーリング調査をしたところ、最下層（第IV層）の標高一・五メートル前後角礫層から粗造の石器が一点出土した。そこで、この角礫層（神田貝塚の最下層）はかつて真上の洪積台地上（大田原遺跡）からの崩壊土であることを指摘した。また、一例だが、九州や山陰地方で浜辺の砂丘に立地し、曾畑式土器が出土する下関梶栗浜遺跡の下層の縄文海進期礫浜が神田貝塚付近最下層の礫層と立地状況が似ている。そのことから、梶栗浜における古式の縄文土器登場の状況と名蔵神田貝塚付近の石器登場の状況が縄文海進期、あるいは海退の開始の時期との関係において考えられないかと述べ、八重山における石器登場の時期が、ひどく降りる時期のものでなく、むしろ想定されていたよりも古い時間の深さを持つものであろうという作業仮説をたてた。（後述の「V 先島（宮古・八重山）の無土器時代の遺跡」のなかの「(20) 名蔵神田貝塚」一一五頁を参照）

三、「無土器時代の初期」という見解

筆者は、無土器時代のなかでもシャコガイ製貝斧が盛行する石垣島の名蔵貝塚群と一〇二点しか発見されない西表島東部の仲間第一貝塚や西部の上原貝塚などは、地域的な違いというよりは時代差を示すものではないかと考える。現在、炭素14年代測定では、名蔵貝塚群の第五地点<sup>23</sup>≡筆者第一二地点二二〇±九〇年BP・第二地点≡筆者第三地点九四五±七五年BP、また、西表島の仲間第一貝塚では一二一〇±一〇〇年BP<sup>24</sup>・一二五〇±六五年BPの値が得られている。名蔵貝塚群がフィリピン方面より渡来した無土器時代の初期の遺跡として位置付けられるならば、筆者はシャコガイ製貝斧が盛行した後、豊富な石材を利用した石斧の利用が高まり貝斧が漸減していったと考えるのである。

表1 名蔵貝塚群と他の無土器時代の貝塚との違い

BP年代	特徴的な遺物	遺物の出土状況	貝塚の範囲	包含層の性質	立地の場所	遺跡の名称	
1. 名蔵貝塚群 第二地点 九四五±七五年BP 第五地点 二二〇±九〇年BP	1. 名蔵貝塚群 シャコガイ製貝斧が盛行 スイジガイ製利器が盛行 有孔石器(石錘) 五点 ・ 神田貝塚 有孔石器(石錘) 一点	ア. 地点貝塚ごとに貝斧、石斧だけまともって出土する	ウ. 長さ約二千六百メートル イ. 長さ約一三万平方メートル	イ. ア. 包含層は薄い 厚さが一〇〜三〇センチメートル	イ. ア. 河川流域 低砂台地	1. 名蔵貝塚群	石垣島
1. 仲間第一貝塚 一二一〇±一〇〇年BP 一二五〇±六五年BP	2. 上原貝塚 シャコガイ製貝斧二点 スイジガイ製利器三点	ア. 遺物が相伴して出土する。	ウ. 長さ約九〇〜一百メートル イ. 長さ約一五〇〜三百平方メートル	イ. ア. 包含層が厚い 厚さ九〇〜二五〇センチメートル	イ. ア. 河川流域 古砂丘(仲間第一貝塚)、海岸低地砂丘(上原貝塚)	2. 1. 仲間第一貝塚 上原貝塚	西表島